

2017 多言語対応・ICT化推進セミナー ～東京2020 オリンピック・パラリンピックに向けて～ 「その英語、外国人には通じません」

2017年7月4日、東京都府中市の東京自治会館にて、主に東京都の市区町村の職員を対象とした「2017 多言語対応・ICT化推進セミナー ～東京2020 オリンピック・パラリンピックに向けて～」が、東京都(オリンピック・パラリンピック準備局)の主催で開催されました。

多言語対応に関わる自治体、観光協会、商工会などの関係団体の職員約 200名が参加し、特別講演や有識者を招いての基調講演、自治体による事例紹介、および多言語対応に資するICT(情報通信技術)最新技術の展示会が行なわれました。

冒頭に、タレントで株式会社DOMOS社長のダニエル・カール氏を招いて、外国人の視点から気付いた日本語と英語の違いについての講演が行われました。(以下抜粋)

私が日本に来たのは40年前。皆さんが英語を勉強されるのと逆に、日本語を勉強しました。その当時は日本語を教える人も英語を話せる人もいなかったの、大変苦労をした。今は国際化で、英語を話せる人もいるし、ICT機器を使えばピッと翻訳が出てくる。しかし今日はそういったICT機器でいかに翻訳するかではなく、コミュニケーション術としての話をしたい。

これまで英語教師や翻訳会社をやってきて、何故日本人は英語が喋れないのかとよく聞かれたが、根本的な考え方そのものが違うので、単語や文法の問題ではない。

まず日本語はよく主語を省く。日本語以外の言語ではこの主語がとても大切で、1つの文章に必ず主語かそれに類するものを入れるが、日本語はできるだけ省くし、長い文章なら冒頭に1回だけ主語を入れてそれきりということもある、世界でも珍しい言語。外国人がそれを聞いていると、これは同じ人の話なのか、それとも主語が途中で変わっているのか、分からなくなる。

日本人は会話自体に情報がとても少なく、それ以外の部分を見て推察するようなコミュニケーションが得意だが、外国人と話す時はそうでない方がよい。アメリカ人は移民文化で、隣近所でも多様な国籍の人達が集まって話すから、相手の文化や情報を細かく気遣っていたら時間が掛かるし、主語や目的語を落としたら話が通じない。日本は鎖国の影響で文化も言語も均質化した。言わなくても分かる、口数が少ない方が美徳、という文化となったが、外国はそうではないので、外国人と喋るときは『行ってきます』ではなく『あのね、これから、私は、学校へ、行ってきます。16時頃、帰るので、それまで留守番を、頼みます』と、ここまで情報を足してあげてほしい。アメリカ人同士の会話では、会話が通じるかどうかは喋る側に責任があるとされるが、日本では聞く側に責任が生じる。聞く方が想像して、言っていないことも察するのが良しとされるが、それは日本人同士だけにしてほしい。

2つ目は単語について。日本語には直訳できない単語や表現がたくさんある。中でも、世界一便利な言葉が『あれ』。辞書で調べても『that』としか載っていない。何故『あれ』を使うのかと考えたが、正しい単語が思い浮かぶ前に喋ろうとするから『あれ』になるのだと思う。外国人と話す時は、代名詞は禁句にしてください。

翻訳家同士で飲んだ時、『以心伝心というのは良い言葉だが訳せない』という話が出た。似たような単語として『察する』『腹を探る』『顔色をうかがう』などの、『言わなくても分かる』という意味合いの言葉は訳せない。訳を色々考えた結果、『テレパシー』だ、ということになった。日本では当たり前前の事でも、外国人から見たら



超能力に思えてしまう。

3つ目は婉曲的な表現。山形で英語教師を始めた時、県内で唯一の外国人教師だったので、毎日違う学校で教えていた。県内の英語教師が集まる研究会の際、会った事のある人が否か判断して挨拶する必要があった。会場で遠くに居たある男性について、上司に『あの人は(知っている)先生ですかね?』と聞いたら、その上司は『あの人は先生ではないかと思うんだけど』と答えた。これは婉曲的な表現で『ではないか』『と思う』『んだ』『けど』と、全部が語尾になる。外国人がこれを聞いたら文法を分析してしまうので、理解不能となる。この回答の意味は『分からない』ということ。英語なら『I don't know』と率直に言えばいいが、日本語の会話で『わからん』と言われると確かに耳障りが悪い。婉曲的な表現はそういう意味で、日本語の優しさだが、外国人には分かりづらい。例えば外国人から頼まれ事をして『ちょっと難しいですね…』と表現したら、外国人には『少ししか難しくないから頑張ってやってやろう』という風に捉えられる。『ごめん、できない』と言うのは失礼だと思うかもしれないが、断られたらそれで次にどうするかを考えることができるのだから、外国人には率直に、さっぱりと伝える方がむしろ優しさとなる。

曖昧さを乗り越えて、スマートに、ストレートに喋ってみてはいかがでしょうか。

(平成29年度作成)